

執筆者一覧（掲載順）

田 島 奈 都 子	青梅市立美術館 学芸員
丹 羽 英 二	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程
廣 瀬 由 子	筑波大学大学院 歴史・人類学サブプログラム 博士前期課程
王 海 翠	非文字資料研究センター 2021 年度奨励研究採択者 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程
池 田 直 也	非文字資料研究センター 2022 年度奨励研究採択者 神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻 博士前期課程
郭 夢 垚	非文字資料研究センター 2022 年度奨励研究採択者 神奈川大学大学院外国語学研究科中国言語文化専攻 博士後期課程
茶 谷 亜 矢	非文字資料研究センター 2022 年度奨励研究採択者 神奈川大学大学院工学研究科建築学専攻 博士後期課程
朴 美 子	非文字資料研究センター 2022 年度奨励研究採択者 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程
余 瑋	非文字資料研究センター 2022 年度奨励研究採択者 神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

■編集後記

『非文字資料研究』第28号をお届けします。今号もポスターから儀礼、劇場と都市の関係を追う研究など、多様な対象を論じた3本の論文が揃いました。非文字資料研究の基盤というべきフィールドワークを主にしながらも、視覚芸術・メディア論や経営組織・技術論、また都市論といった隣接分野との越境を試みる、革新的な研究を紹介することができました。巻頭を飾る田島氏の論文は、日本近代における写真とポスターの関係の歴史をめぐって、長年多くの作品を実見してきた経験から導き出された議論となっています。複製やアダプテーションが支配的になっていくメディア環境を論じる貴重な研究を、どうぞお読みください。（田島氏からは表紙の図版もご提供いただきました。）

また今号では2021・2022年度奨励研究の成果として、6本の論文が掲載されています。コロナ期においてなかなか思うように研究が進捗しない状況でも、海外や日本の諸地域で粘り強く実地調査を行い、論文としてまとめられました。研究者としての最初の一步であるとともに、博士論文につなげたり、のちの研究者としてのキャリアに幅をもたせるものとなったりすることを切に願っています。研究者支援もまた、神奈川大学そして非文字資料研究センターの大きな務めであるように感じています。

このように本誌は、「非文字資料研究とは何か」という問いを中心にしながら、さまざまな背景のもと、多様な主題について書かれた論文で構成されています。「人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」というユネスコ憲章のことばをまねるなら、大学の研究状況が厳しさを増す現在にあっても、「非文字資料研究」という「とりで」は守らねばならない。このような想いで今後も編集できればと考えています。（熊谷謙介）

■表紙説明

〈表紙〉

《昭和大東京百図絵 第44景 十二月二十九日皇太子殿下御命名祝日の日本橋》木版／紙、1934年1月、信州新町美術館蔵

《昭和大東京百図絵》は1928～40年に制作された、改版を含めると100点を超えるシリーズ版画である。作者の小泉癸巳男（こいずみ・きしお、1893～1945年）は、昭和戦前期に自画・自刻・自摺を旨とする創作版画家として活躍した人物である。しかし、残念ながら今日では「知る人ぞ知る」存在に留まっている。

さて、その第44景として描かれた《十二月二十九日皇太子殿下御命名祝日の日本橋》は題名が示す通り、1933年12月23日に誕生した皇太子（現、上皇）の名前が決まったことが発表された、29日の東京の中心部の様子を写した作品である。

1911年に竣工して現在に至る石造の日本橋は、紅白のリボンで飾り付けられ、市民の足であった路面電車は、28～30日にかけて「花電車」の仕様となった。画面右上の無数の赤い点は、29日午後3時半から1時間ほど行われた、30機からなる飛行隊によって、上空から撒かれた紅白の奉祝ビラを示している。

本シリーズに関しては版木が現存しており、本作は通常よりも多い版数で仕上げられていることも判明している。しかも、空の色は上辺の群青から橋の欄干付近のオレンジ色までが、微妙なグラデーションで表されており、こうした表現からは小泉の版画家としての実力が見て取れる。もっとも、本作から強く感じられるのは、皇太子の誕生という慶事に対する、当時の一般市民の素直な喜びである。

〈裏表紙〉

現在の日本橋

この写真は表紙に紹介した、小泉癸巳男による《昭和大東京百図絵 第44景 十二月二十九日皇太子殿下御命名祝日の日本橋》と対をなす、現在の日本橋を撮影したものである。

日本橋の上に架かるのは首都高速道路であり、魅力的な石橋の全容や装飾は、十分に堪能できない状況になっている。このため、こうした従来からの課題に加えて、近年は都市景観と日本橋地区の再開発があいまって、同地区の高速道路を地下に移設する検討が具体的に進められつつある。ただし、工事費用は数千億円、工期も10年以上と見積もられており、1999年に国の重要文化財（建造物）に指定された日本橋の上に、再び空が見られるようになるのはまだ先である。

ちなみに、《昭和大東京百図絵》は、1923年に起こった関東大震災による被害と、そこから復興する東京の変化が制作の契機となっている。このため、小泉が自身の最後の十数年をその制作に捧げた本シリーズは、昭和戦前期の様子を今に伝える作品として、挿图的に取り上げられる機会が多い。また、作品に通底するレトロでモダンな雰囲気や、独特の色彩感覚には洒落たところがあり、そうした点は若い世代には新鮮に映るようでもある。

100点を超える作品を総覧すると、社寺や橋、公園は比較的良好に原形を留めている。ただし、その背景や周囲にはいずれも高層ビルが立ち並んでおり、東京が改めて変わりつつあることもよくわかる。

（田島奈都子）

非文字資料研究 第28号

The Study of Nonwritten Cultural Materials No. 28

発行日 2024年3月20日

編集・発行 神奈川県立 日本常民文化研究所 非文字資料研究センター

〒221-8686

横浜市神奈川区六角橋3-27-1

<http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

印刷 株式会社 精興社

雑誌コード ISSN 2432-5481